

バラク・オバマの「より完全な連邦」演説にみる人種ビジョン
— 「ポスト人種社会」論への批判的介入のために—

Racial Visions of Barack Obama's "A More Perfect Union" Speech:
For a Critical Inquiry into the Framework of a "Postracial Society"

村田 勝幸*
Katsuyuki Murata

Abstract

This paper aims to work on what has been known as a "postracial society" thesis through a reconsideration of Barack Obama's "A More Perfect Union" speech, which he gave on March 18, 2008. Obama's silence on racial issues has been presumed to be one of his rhetorical characteristics and/or tactics. Therefore, the speech, which he delivered in the midst of the heated presidential race, was nothing but exceptional. What is the specific background on which Obama decided to give the speech? How does the rhetoric and logic of the speech relate to his thoughts and personal history? What are the arguments for or against the speech? These are among lots of questions which interconnect each other.

There is no doubt that we always have to be conscious of the difficulty of talking about race without reinforcing racial stereotypes or distorted views which are still widespread in American society rather than destroying them. I am fully aware that this piece's attempt to focus on the relationships between Obama's thoughts and America's racism could paradoxically end up defining him a priori as a "racial being." The very decision to pick up an issue of racism as the key point, despite there are countless approaches to analyze Obama, could help acknowledge the argument that a black politician should "naturally" be discussed within a racial framework. In other words, we could paradoxically strengthen the very racial stereotypes which at the outset we tried to criticize. In a sense, this paper is a tentative trial to struggle with this racial paradox.

「もしわたしに息子がいるとしたら、トレイヴォンに似ているでしょう。」

"If I had a son, he'd look like Trayvon."

(オバマ、2012年3月23日)

「トレイヴォン・マーティンが35年前のわたしだということもありえました。」

"Trayvon Martin could have been me thirty five years ago."

(オバマ、2013年7月19日)

* 北海道大学大学院文学研究科准教授、Associate Professor, Graduate School of Letters, Hokkaido University
E-mail: kmurata@let.hokudai.ac.jp

I. はじめに——人種をめぐる沈黙を破る

2012年2月26日の午後7時頃、フロリダ州のサンフォード市にあるゲーティッド・コミュニティに客として招かれていた17歳の黒人青年トレイヴォン・マーティンが、コンビニでの買い物を終えてコミュニティ内を歩いていたところ、「フード付きのスウェットシャツを着た怪しい黒人が歩いている」との理由で自警団のメンバーであったジョージ・ジーママン (George Zimmerman)¹によって射殺された。ジーママンが「正当防衛」を理由に逮捕を免れたことが報道されると、ニューヨークやロサンゼルス、シカゴなど全米各地で激しい抗議デモが発生した。マーティンの射殺を「憎悪犯罪 (hate crime)」であると断定したこの全米規模の動きは、フロリダ州の警察や司法当局、さらにはジーママンの逮捕と訴追を見送らせる根拠となっていた同州の「正統防衛法 (Stand-Your-Ground Law)」²を問題化せよという声の高まりを象徴していた。エピソード上段のコメントは、白人が多いオバマのスタッフがオバマの気持ちを付度してこの事件について触れることを回避するなか、連邦司法省による予備調査の終了直後にオバマ本人の口から満を持して発せられたものである。

司法の場で「憎悪犯罪」が裁かれることを求めた人びとはおそらく、歓喜の声をあげたあと、その満足感を粉砕して余りあるほど大きな挫折を味わうことになった。2012年4月11日にフロリダ州検察局がジーママンを殺人罪——第二級謀殺——で訴追すると発表したことで司法の審理が開始されたこの事件は、翌2013年の7月13日に陪審が無罪評決を下したことで幕引きとなったのである。無罪評決への検察による控訴が認められないというアメリカの刑事制度の壁を前に、多くの黒人たちは数多ある「前例」を集会的記憶のなかに求め、怒りと悲しみを共有した。エピソードの下段は、アメリカの刑事制度への不信感を煽ることを慎重に避けつつ黒人住民の集会的記憶に寄り添って痛みを共有しようというオバマの姿勢が言語化されたものと言えるだろう。

本稿の目的は、「トレイヴォン・マーティン射殺事件」を論じることではない³。にもかかわらずこの事件を導入部で取りあげることにしたのは、オバマと人種 (主義) というテーマを考えるうえで格好の出発点になりうると考えたからである。まず、トレイヴォン・マーティンという黒人少年に言及したオバマのレトリックの特徴として注目されるべきは、被害者を指すのにオバマが「黒人」という人種明示的な言葉を用いていないという点である。オバマは、引用した前段の発言の前後でトレイヴォン・マーティンを失った両親の心情に寄り添う言葉を重ねているが、それにより人種の違いを超え広く子を失った親すべての身に起こった悲劇に共感するという姿勢を示すことが可能となる。もちろんマーティンが黒人青年であることは周知の事実であるので、明示的な言葉はなくとも黒人住民の多くは人種を同じくする「わたしたちの悲劇」としてオバマが捉えていると自然な流れで了解するわけである。後段の引用も同様に、人種明

¹ 父親がドイツ系で母親がペルー系のジーママンに関して、警察は「白人」と説明していた。ただ新聞報道等では、「白人」「ヒスパニック」などの説明が混在している。

² フロリダ州で2005年に法制化された同法は、自分の生命を脅かす相手に対して、ストリートであろうが酒場であろうが「正当防衛」を根拠に発砲してもよいとしている。また同法には、「正当防衛」を規定する一般的な法律が通常条件として求める「退却義務」が存在せず、「正当防衛」か否かの立証義務も加害者側ではなく被害者側に求められている。

³ トレイヴォン・マーティン射殺事件は、その後の刑事裁判から無罪評決へといたるプロセスすべてを含めて、アメリカにおける人種 (主義) の在り方を考えるのに格好の素材を提供してくれる。連邦のみならず州レベル以下の刑法や司法制度の実態、広く「憎悪犯罪」と規定される事件への人種ごとの認識の違い、そしてとくに黒人住民が今なお共有し、ことあるごとに喚起される集会的記憶というテーマなど、事件に対するオバマの見解という枠組みをはるかに超えた論点が数多くそこに存在する。ただ、ここで立ち入って論じる余裕はないため、稿を改めて分析を加えたい。

示的な言葉が使われていない点が重要である。無罪評決が出され、怒りと不満が噴出した黒人コミュニティに対し、アメリカの法制度のインテグリティを変わず信用し続けて欲しいという訴えのなかで表明された「35年前のわたしだったかも」という説明は、黒人の集合的記憶への寄り添い度合いを一段階上げることによって法の支配という原則の世界に黒人住民を引きとどめようとしたオバマの苦悩を垣間見させてくれる。

人種明示的なレトリックの回避はオバマの説明の一般的な特徴であり (Sugrue 2009)、トレイヴォン・マーティン射殺事件に言及した彼の言葉もおおむねそれを反映したものである。ただ、それでもマーティンという具体的な存在を名指しすることで聞く者全員に「人種の問題」への意識を強く喚起するという手段を採ったこと、言い換えれば間接的な人種話法に訴えたことは、ある意味で「例外的な」事例であった。

そのオバマが間接的ではなく直接的に、つまり人種明示的に語ったのが、「より完全な連邦 (a More Perfect Union)」と題される演説である。2008年3月に行われた「より完全な連邦」演説がどのような背景でなされたのか。演説を構成するレトリックやロジックがオバマの思想や歴史とどのように照応しているのか。あるいは、演説をめぐってどのような評価や批判がなされているのか。本稿の狙いは、これらの問いに注目することを通して「ポスト人種社会 (postracial society)」という (不幸にも) オバマと自動的に結びつけて捉えられやすい概念を批判的に再検討する地平を拓こう、というきわめて限定的なものである。

もちろん、このようなアプローチにいくつかの危険性が伴うことも承知している。まず、バラク・オバマを分析対象としながら大統領選や彼の個々の政策に広く立ち入って論じていないという点は、ここでの分析の大きな限界である⁴。そのことはまた、人種 (主義) という論点に注目しようという——むしろ「人種がすべて」とは考えていない——本稿の議論が、結果的にバラク・オバマという人物をもっぱら「人種的な存在」としてア priori に規定する見方をはからずも強化してしまうのではないかと、という懸念と不可分な関係にある。オバマという個人を論じるにあたっては、もちろん無数の切り口やアプローチがある。であるにもかかわらずあえて人種 (主義) というテーマで分析しようという選択には、「黒人」政治家の場合は何よりその人種性を考察することが「自然」であるという社会のステレオタイプを追認してしまう可能性がつきまとう。つまり、既存の人種的なステレオタイプを批判しようという行為が結果的にそのステレオタイプを強化してしまう、という人種言説のパラドックスにはまってしまうのである。このパラドックスの問題性は、白人についてはその大半が人種属性を問われないという非対称な人種力学⁵からも明らかである。本稿のすべての記述が、このような陥穽の自覚のうえに展開されていることをひとまずここで付言しておきたい。

II. ジェレマイア・ライト牧師という「悪魔の誘い出し役 (devil's advocate)」?

1. 噴出する怒り、問題化される人種言説

⁴ 一点だけ先行研究をあげるならば、オバマの思想を「熟議デモクラシー」の典型と捉えるジェイムズ・クロッペンバーグの議論は、かならずしも人種 (主義) に関わるものに限定されたものではないが、非常に示唆的である (クロッペンバーグ、2012年)。

⁵ 白人を「逆差別」の被害者であると表層的に規定する見方を理論的に正当化している「カラーブラインド原理主義」を徹底的に批判する議論として、ジョージ・リップシツの一連の分析は重要である。彼は一貫して、アメリカ史上、白人こそがさまざまな「アフターマティヴ・アクション」の受益者であったと具体的な事例に基づいて主張している (Lipsitz, 1998; Lipsitz, 2011)。

大統領選挙戦が本格的に熱を帯びはじめていた2008年の3月中旬、人種を政治争点とすることを避け続けてきたオバマ陣営に激震が走った。オバマがシカゴでコミュニティ・オーガナイザーをしていた頃、彼をキリスト教の信仰に導き、ミシェルとの結婚式を取り仕切り、娘たちの名付け親にもなったトリニティ統一教会のジェレマイア・ライト牧師 (Reverend Jeremiah Wright) の「反アメリカ的」な説教の映像を3月13日に『ABCニュース』や『Foxニュース』などが流し始めると、テレビや活字メディアだけでなくサイバースペースもライト牧師の「過激な言葉」で溢れかえった (Kantor 2008; Heilemann and Halperin 2010: 234-35)。

ユーチューブなどを通して発信され、無数の視聴者に繰り返し参照されたのは、主にライト牧師が行った二つの説教のサウンドバイトであった。その一つ、9・11テロ直後の2001年9月16日に行った説教のなかでライト牧師は、アメリカがパレスチナや南アフリカなど国外で行った政策のしっぺ返しとして9・11テロが起こったのだと説明し、マルコムXの有名な訓戒を引いて、「アメリカの鶏が巢作りのために家に戻ってきた」——つまり自らが蒔いた種だ——と語っていた。暴力の連鎖を批判するべくなされたライト師の主張は、9・11テロという「聖域」を冒涇した「反アメリカ的な暴言」として脱文脈化されることとなった。また2003年4月13日の説教では、アメリカ政府がこれまで行ってきた嘘 (とライト牧師が考えているもの) を主題としていた。アフリカ系アメリカ人を騙して意図的に梅毒に罹患させるという実験を行った、非白人たちを絶滅させる手段としてHIVウィルスを発明したことを偽っていた、さらには、黒人たちにドラッグを与え、巨大な刑務所を建設し、「三振法」——罪の軽重にかかわらず三回罪を犯せば終身刑に処するという法——を制定した、と断罪の言葉を並べている。

扇動的な性格が加重されたサウンドバイトのかたちで溢れ出たライト牧師の説教への関心は、その「過激さ」への注目が一段落するや、すぐにライト牧師とオバマの20数年らしいの関係へと矛先が移行した。日常的に懇意にする教会や牧師の選択は慎重な個人的判断をもとになされたものであり、「アクシデント」と切り捨てることはできないからである (Sullentrop 2008)。こうしたなか、早くも3月14日の時点でオバマは火消しを試みている。『ハフィントン・ポスト』紙に発表した「わたしの信仰と教会に関して」と題する説明には、すみやかにライト牧師から距離をとろうという姿勢が顕著にうかがえる。「つい先頃最後の説教を行い引退の準備をしている、わたしが通う教会の牧師、ジェレマイア・ライト師が、ここ数日、激しい論争を巻き起こしてきた。わたしたちの国、わたしたちの政治、そしてわたしたちの政敵について行った激情的でぞっとさせるような発言 (inflammatory and appalling remarks) の結果、彼は注目を集めてきたのである。この論争の主題となっている彼の発言に対してわたしがまったく意見を異にしており、強く批判していると、まず最初に言わせてもらいたい。わたしたちの偉大な国を傷つけ、同盟諸国とわたしたちとを分断する力となるような発言を、いかなるものであれ、わたしは無条件に非難する。……要するに、問題となっているライト牧師の発言をまったく受け入れることはできないのである」と冒頭で強調している (Obama 2008b)。

2. 脱文脈化されるライト牧師の説教

ライト牧師による説教の「扇動性」や「過激さ」は、彼の言葉がサウンドバイトのかたちで切り詰められて提示されたことや全体の文脈から切り離されて単純化されたことによってフレームアップされたという面がたしかにある。ここでいう脱文脈化とは、個々の説教全体から部分をつまみ食的に切り取ることでそもそも説教全体の主張 (ないし論旨) から外れた解釈を生み出し強調する、ということにとどまらない。多くの黒人教会において歴史的に広くなされてきた説教 (ないし説明話法) に関わる「伝統」という文脈から切り離されて、ライト牧師の

説教が「反愛国主義的」でエキセントリックなものとしてされているのである。

「反白人的」かどうか、「反愛国主義的」かどうかという価値評価は、個々の説教で使われた言葉だけでなく、説教が行われた場がいかなる性格を持ち、いかなる歴史を背負っているかといった点を抜きに下すことはできない。端的には、黒人教会——より限定的にはトリニティ統一教会——という場の特性とその歴史、あるいは「黒人解放神学 (Black Liberation Theology)」思想の伝統が視野に入れられなければならないのである。この点に関して、聖書学者であるオベリー・ヘンドリックス・ジュニアは、トリニティ教会において黒人性を前面に出すという行為は決して「反白人」的なものではなく、奴隷制とジム・クロウ制度下の人種隔離という伝統を持つアフリカ系アメリカ人に訴えるための言説的な戦術なのだと説明する。またヘンドリックスは、ライト牧師の激しいアメリカ批判に関して、その現実から遊離したような彼の言葉を黒人教会における説教の話法という文脈の内側に置くならば、「聖書にある嘆き (biblical jeremiad)」の典型と捉えることができる、と説明する。黒人教会の伝統にとどまらず、アメリカにおいて17世紀以来、黒人か白人かを問わず牧師たちが長らく用いてきた「嘆きに訴える説教の伝統 (jeremiad tradition of preaching)」こそが、ライト牧師の話法の基盤となっているのである。ヘンドリックスは、「適切に検討されるならば、ライトの発言もまた嘆きを語った例の一つであり、もっともな怒りであっても独善的になってはいけない、わたしたちもまた無辜の民の大量殺人に荷担してきたのだ、という点をアメリカ人に想起させることを目的としていた」と論じ、問題視された説教の再文脈化を試みている。アメリカの行為に関するライト牧師の説明の大半は、メディアによる歪曲がなければ「妥当な批判」であり「正確な評価」であった、とヘンドリックスは説明している (Hendricks 2009: 166-71)。

III. 「より完全な連邦」演説という賭け

1. 消極的な反論ではなく積極的な説得へ

大統領選挙の予備選がヒートアップし、民主・共和という党の違いを超えて「敵失」が粗探しされるなか、ライト牧師による「扇動的な」説教についてのオバマの見解と二人の20数年らしいの交流関係への猜疑的・批判的な眼差しは、鎮静化するどころか日に日に強まっていった。3月14日の「わたしの信仰と教会に関して」と題した説明でオバマはライト牧師の主張を真っ向から否定していたが、件のサウンドバイトは変わらず世界中を飛び交い、大統領候補者の資質を判断する材料であるかのようにメディアで扱われ、識者の批判の対象となり続けた。ライト牧師の発言と思想については選挙戦当初から聞き知っていたことわったうえで、彼が引退間近であることと大統領選のさなかにトリニティ教会との関係を絶つのは適切でないと判断したことを、オバマはライト牧師を問題化することなくトリニティ統一教会との関係を維持し続けた理由として挙げていた (Obama 2008b)。

だが、たしかにこの説明は歯切れが悪く、もっと注目を引くかたちでライト牧師との「決別」を印象づける必要があった。と同時に、市民権 (公民権) 運動世代の黒人としてアメリカ社会の人種主義と根気強く闘ってきたライトを切り捨てることは、アメリカ社会に依然として存在する人種主義とそれに付随する問題に関するオバマ自身の信念や姿勢を裏切る保身行為と解釈される危険性もあった。「表面的なライト牧師批判」と単純化されないような論理構成が、事態の沈静化のためにオバマに求められたのである。評論家のデリック・ジャクソンは、この失敗をいっさい許されない状況をこう表現している。「希望に訴える人種横断的な選挙戦 (a crossover

campaign of hope) を展開しつつ黒人たちの怒りという視点をうまく説明することは、まさに奇跡と言えるだろう。言葉一つすら間違ふことは許されない。彼〔オバマ〕は、メッセンジャーを強く批判せずにメッセージそのものを拒否しようとしたのである」と (Jackson 2009a: 24)。

それゆえに、3月18日に行った37分にもおよぶ「より完全な連邦」演説は、「表面的なライト牧師批判」を論理枠組みにおいて乗り越え止揚するという「奇跡」に賭けた試みであった。そしてもっとも重要なこととして、ライト牧師論争を人種に関する自らの思想を広く伝える機会へと転換するきっかけにもなったのである。

オバマ陣営のシニア・アドバイザーであるデイヴィッド・アクセルロッドは、大統領就任式の6日前に行われたインタビューのなかで「より完全な連邦」演説の画期性について触れている。彼によれば、当時連邦上院議員としての公務に追われアメリカ中を飛び回るなか、オバマは『シカゴ・トリビューン』紙と『シカゴ・サン・タイムズ』紙の編集者と何度か面談していた。オバマが語ったことを編集部がまとめるという段取りがついていたが、最終的にはオバマ自らがライト牧師に関する声明を書きたいと言いつつ出した。「この人種に関するスピーチを自分でやりたい。適切な視角のなかに位置づけたいんだ」との要求を出したオバマが、演説の二日前の晩に草稿を書き、演説当日の午前2時にそれをブラックベリーを使ってアクセルロッドに送信した。その文章を読んだあと「これを読めばあなたが大統領になるべきだということがわかります (This is why you should be president.)」とメールで返信した、控え室で演説を聴きながらミシェル・オバマやオバマのアドバイザーや友人たちが嗚咽していた、というアクセルロッドの説明には、たぶんに美談化の臭いが感じられる。ただそれを差し引いたとしても、演説がハイリスクな賭けであった——そして結果的に賭けに勝利して大きなリターンを手にした——ことを確認できる言えるだろう (Jackson 2009b: 232-34)。

ハイリスクな賭けであるという覚悟はあったにせよ、オバマがただ闇雲に勝負に打って出たわけではもちろんなかった。演説を行う舞台は周到に整えられていたのである。「より完全な連邦」演説の舞台は、愛国主義的伝統という面でもっとも象徴的なフィラデルフィアにある憲法センターに設えられた (Hendricks 2009: 173)。人種に関する演説を建国始祖の精神を喚起することから始めるという壮大な構成は、「ライト牧師論争」という枠組みに狭隘化されないため、さらには自らの人種 (主義あるいは問題) 認識の提示を通して次期大統領としての資質の高さを印象づけるためにも必要であった。つまり演説は、「ライト牧師論争」をめぐる消極的な反論のためではなく、あくまでそれを素材としてすべてのアメリカ人に語りかけるという積極的な説得のためになされるというように新たな意味づけが施されていたのである。

2. 「より完全な連邦」演説のレトリックとロジック

このように3月18日の「より完全な連邦」演説は、現状打開のための窮余の策であると同時にアメリカ国民に自らの思想信条を包括的に伝える好機でもあった。アメリカ史研究者のトマス・スグルーは、「彼〔オバマ〕は、防御に走るのではなく、正統性の危機を願ってもない好機に変えた。その過程で、力強く洗練され広範におよぶ演説を行ったが、それは間違いなくこれまでの主要な政治的人物による人種に関する論及のなかでもっとも造詣の深いものであった。……けれども、オバマが成し遂げたことはそれ以上に意義深いことであった。彼は、過去に問題があったことやその遺産が現在も残存することを認め、そこからの出口を提供する公共政策の原理原則を提示することで、この国家に深く根ざしている分断状況から抜け出すためのみちをアメリカの人びとに差し出した」と演説の意義を説明する (Sugrue 2009: 118)。「より完全な連邦」演説はどのような意味で意義深いのか。あるいはオバマはなぜハイリスクな賭けに

勝つことができたのか。以下では、抜粋のかたちではあるが、演説の具体的な内容とレトリックに注目することでこれらの点を考えたい (Obama 2008a)。

演説は、221年前——つまり1787年——に「通り向こうの集会所」に集った男たちが行った独立宣言の発表という「ありそうもない実験 (improbable experiment)」に関する説明から始まる。宣言を支える崇高な精神は「奴隷制というこの国の原罪」によって汚点を付けられた。奴隷制は、南北戦争が終結するまで棘となって憲法に突き刺さったままであった。アメリカ憲法をめぐる矛盾、つまり「法の下での平等な市民権」を謳った憲法が奴隷制を容認するという矛盾の解消が、あるいは連邦の完成が将来の課題として託されるという論理展開が、演説全体の基調的トーンをまず決定する。ケニア出身の黒人男性とカンザス出身の白人女性のあいだに生まれ、白人の祖父母と長く一緒に生活し、世界中に血縁関係者がいるという有名なオバマの履歴が、建国の精神を脈々と継承したアメリカ国家物語の枠組みの内側に定置されている点は、何より重要である。

この選挙戦で人種が争点ではなかったと言うつもりはありません。選挙戦のさまざまな段階で、わたしのことを「黒人すぎる」とみなすコメンテーターもいましたし、「真の黒人ではない」とするコメンテーターもいました。サウスカロライナ州予備選の前週には、人種的緊張は目に見えるほど沸き立っていました。

This is not to say that race has not been an issue in the campaign. At various stages in the campaign, some commentators have deemed me either “too black” or “not black enough.” We say racial tensions bubble to the surface during the week before the South Carolina primary.

人種明示的な説明を可能な限り避けてきたオバマにとって、人種というテーマへの最初の接近が難題の一つであったに違いないことは、二重否定のかたちで議論を起していることからもうかがえる。あえて「黒人すぎる」「真の黒人ではない」という批判を持ち出すことによって、これから発する言葉が表面的な美辞麗句ではなく自らの心の奥底から紡ぎ出されたものであるという印象を強く与える。

けれども、今回の選挙戦で人種をめぐる議論がとりわけ分断的なものに変化したのは、ついこの二週間ほどのことです。・・・他方で、わたしのかつての牧師であるジェレマイア・ライト師が、人種間の溝を広げるだけでなく、わたしたちの国の偉大さと善良さを傷つけうる見解を扇動的な言葉を使って表明しているのを耳にしました。その見解は間違いなく白人も黒人も同じように怒らせるものです。

And yet, it has only been in the last couple of weeks that the discussion of race in this campaign has taken a particularly divisive turn.... On the other end, we've heard my former pastor, Reverend Jeremiah Wright, use incendiary language to express views that have the potential not only to widen the racial divide, but views that denigrate both the greatness and the goodness of our nation; that rightly offend white and black alike.

ここでライト牧師への言及がはじめてなされている。発言の問題を「潜在性 (the potential)」

として説明している点は重要である。ここでは「扇動的な言葉 (incendiary language)」という表現を使っているが、3月14日の説明では「激情的でぞっとするような発言 (inflammatory and appalling remarks)」とされていた (Obama 2009b)。

そのような論争を招いたライト師の声明を、わたしはすでに明確に糾弾してきました。それでもまだ疑問は残っています。ライト師がアメリカの国内政策と外交政策を激しく批判することがときどきあったことをわたしが知っていたか？もちろんです。わたしが教会に座しているとき、彼が物議を醸しかねないような発言をするのを直接聞いたことがあるか？ええ、あります。彼の政治見解の多くに同意できないという意を強く持ったか？もちろんです。みなさんも牧師や司祭、ラビの発言に強く反発した経験がおりかと思いますが、それと同じです。

I have already condemned, in unequivocal terms, the statements of Reverend Right that have caused such controversy. For some, nagging questions remain. Did I know him to be an occasionally fierce critic of American domestic and foreign policy? Of course. Did I ever hear him make remarks that could be considered controversial while I sat in church? Yes. Did I strongly disagree with many of his political views? Absolutely—just as I'm sure many of you have heard remarks from your pastors, priests, or rabbis with which you strongly disagreed.

オバマがライト牧師の見解を支持するかどうかという点は、まさに論争の中心的論点であった。オバマがFAQ的に具体的な問いを自ら列挙していることから、この核心的な論点に関して主導権をとるという意思がうかがえる。ライト牧師のことを十分に知らなかったとする安易な逃げの論法が持つ政治的リスクを重々認識していたのではなからうか。3月14日の説明では、「この論争の原因となっているライト牧師の発言は、わたしがトリニティ教会の信者席に座って聞いた彼の説教の言葉とも個人的な会話のなかで聞いた言葉とも違う」とあり、9・11テロは自業自得、HIVウィルスは黒人コミュニティを減ぼすために政府が発明したもの、というような具体的な主張を批判の対象としていた (Obama 2009b)。この演説では、ライト牧師の「過激な」言葉と思想一般へと論点をずらしたうえで、そのことを知っていたと認めるという方針に転換したと思われる。

けれどもじつのところ、それがわたしの知るライト師のすべてではありません。わたしが20年以上前に出会った当時の彼はわたしをキリスト教信仰へと導き、人は互いに愛し合わなければならない、病める人を介抱し貧しい人を助けなければならない、そう教えてくれた人物でした。

But the truth is, that isn't all that I know of the man. The man I met more than twenty years ago is a man who helped introduce me to my Christian faith, a man who spoke to me about our obligations to love one another, to care for the sick and lift up the poor.

これが、わたしがトリニティ教会で経験したことです。この国にある他の黒人教会と

同じように、トリニティは黒人コミュニティをその全体性において具現化しています。医者もいれば福祉を受給している母親もいますし、模範的な学生もいれば元ギャングもいます。他の黒人教会と同様、トリニティでの礼拝は騒々しい笑い声とときには野卑なユーモアに満ちています。慣れない人の耳には迷惑なだけかもしれないダンスや拍手、金切り声、叫びに満ちています。あの教会には優しさと残酷さ、荒々しい知性と驚くほどの無知、苦闘と成功、愛、そう、そしてアメリカに住む黒人の経験を構成する苦々しい思いや偏見が溢れているのです。

This has been my experience at Trinity. Like other predominantly black churches across the country, Trinity embodies the black community in its entirety—the doctor and the welfare mom, the model student and the former gang-banger. Like other black churches, Trinity’s services are full of raucous laughter and sometimes bawdy humor. They are full of dancing, clapping, screaming and shouting that may seem jarring to the untrained ear. The church contains in full the kindness and cruelty, the fierce intelligence and the shocking ignorance, the struggles and successes, the love and yes, the bitterness and bias that make up the black experience in America.

じつのところ、「だから、ここで文脈のようなものを提示させて欲しい (Let me therefore provide some context.)」ということわりのあとライト牧師の「愛国者」としての姿やコミュニティへの献身ぶりなどに触れていることからもうかがえるように、「より完全な連邦」演説に先だつ3月14日の説明においてもライト牧師を切り捨てない姿勢は明確であった (Obama 2009b)。ただそこでの肯定的描写は、どちらかと言えば、彼との関係を長らく維持し続けてきたオバマ自身の判断を間接的にでも正当化するという狙いと不可分の関係にあったように思われる。他方で演説のほうの論理展開は、ライト牧師が仕える黒人コミュニティのせめぎ合いに満ちた姿についての生き生きとした描写と接続されることでライト牧師を単なるエキセントリックな過激者とみなして切り捨てることを阻止するための包括的な文脈を与える、というものである。

このように説明すれば、わたしとライト師の関係を理解する一助になるかもしれません。彼は不完全な人間かもしれませんが、わたしにとってはずっと家族のような人でした。彼はわたしの信仰を深め、わたしの結婚式を取り仕切り、わたしたちの子どもに洗礼を授けてくれました。わたしとの会話のなかで、エスニック集団のことを彼が差別的な用語で語るのを聞いたことは一度もありませんし、交流のある白人に対してはいつも礼儀正しく敬意を持って接していました。良いものであれ悪いものであれ、長年にわたって熱心に仕えてきたコミュニティが抱える矛盾を、彼は自らの内側に抱えているのです。

And this helps explain, perhaps, my relationship with Reverend Wright. As imperfect as he may be, he has been like family to me. He strengthened my faith, officiated my wedding, and baptized my children. Not once in my conversations with him have I heard him talk about any ethnic group in derogatory terms, or treat whites with whom he interacted with anything but courtesy and respect. He contains within him the contradiction—the good and the bad—of the community that he has served diligently for

so many years.

わたしが黒人コミュニティと縁を切ることができないように、彼とも縁を切ることができません。わたしの白人の祖母と縁を切ることができないように、彼とも縁を切ることができないのです。わたしの祖母はわたしを育てるのに助けとなり、わたしのために何度も身を削り、この世の中で愛したどんなことにも劣らずわたしを愛してくれました。けれどもその祖母は路上ですれちがった黒人男性に恐怖を感じたとかつてわたしに打ち明けたことがありますし、私をたじろがせるような人種やエスニシティに関するステレオタイプを何度となく口にしました。

I can no more disown him than I can disown the black community. I can no more disown him than I can disown my white grandmother—a woman who helped raise me, a woman who sacrificed again and again for me, a woman who loves me as much as she loves anything in this world, but a woman who once confessed her fear of black men who passed by her on the street, and who on more than one occasion has uttered racial or ethnic stereotypes that made me cringe.

ライト牧師とオバマの白人の祖母が「矛盾」によって結びつけられていることが、ここでもっとも重要な点である。そしてその「矛盾」とは、「異常」や「問題性」などを連想させるものではなく、各人が当たり前のものとして内面に抱える葛藤を表している。そのかぎりでは、「矛盾」は「日常」や「常態性」と親和性を持っている。もちろん、オバマがその「矛盾」を無条件に受容せよとアメリカ社会に訴えているわけではない。「矛盾」が、誰もが抱える内的な複雑性や動態性の産物である以上、ライト牧師や白人の祖母との関係を切って問題を解消するという選択肢にはまったく現実味がない。ライト牧師を擁護するか否かという二者択一的な問い立ての問題性を前景化しながら、人種（主義）という争点がアメリカに住む者すべてに関わるものであるというオバマの基底的認識へと論争の枠組みを止揚させる重要な部分である⁶。

けれども、人種はいまこの国が無視することなど決してできない争点であるとわたしは考えています。そんなことをすれば、アメリカに関する不愉快な説教でライト師がおかしたのと同じ過ちをわたしたちもおかすことになるでしょう。現実を歪めてしまうほどに否定的な面を単純化し、ステレオタイプ化し、増幅してしまうことになるのです。じつのところ、この数週間になされた批評や表面化した争点は、わたしたちがこれまで取り組みきれなかった、この国の人種をめぐる複雑さを反映しているのです。それは、わたしたちがまだ完成をみていない連邦という目標の一部なのです。もしわたしたちがいまここから立ち去り、それぞれの片隅へとただ逃げ込んでしまったら、保健医療や教育、すべてのアメリカ人に良い仕事を見つける必要などといった難問を解決するために結束することなど決してできないでしょう。この現実を理解するには、わたしたちがこの地までどのようにして到達したかを思い起こすことが必要でしょう。ウィリアム・フォークナーはかつてこう書きました。「過去は死んで葬られてはいない。

⁶ 側近のアクセルロッドによれば、この白人の祖母の人種主義に関する描写が、オバマが書くのにもっとも苦痛を感じた箇所だったという (Jackson 2009: 233)。

じつのところ過去ですらないのだ」と。ここで、この国の人種的不正義の歴史を復唱する必要はありません。けれども、今日のアフリカ系アメリカ人コミュニティに存在する格差の多くが奴隷制やジム・クロー制という残忍な遺産のもとで苦しんだ過去の世代から連綿と続いてきた不公平に直結するのだという点を、わたしたちはあらためて思い起こす必要があります。

But race is an issue that I believe this nation cannot afford to ignore right now. We would be making the same mistake that Reverend Wright made in his offending sermons about America—to simplify and stereotype and amplify the negative to the point that it distorts reality. The fact is that the comments that have been made and the issues that have surfaced over the last few weeks reflect the complexities of race in this country that we've never really worked through—a part of our union that we have yet to perfect. And if we walk away now, if we simply retreat into our respective corners, we will never be able to come together and solve challenges like health care, or education, or the need to find good jobs for every American. Understanding this reality requires a reminder of how we arrived at this point. As William Faulkner once wrote, "The past isn't dead and buried. In fact, it isn't even past." We do not need to recite here the history of racial injustice in this country. But we do need to remind ourselves that so many of the disparities that exist in the African-American community today can be directly traced to inequalities passed on from an earlier generation that suffered under the brutal legacy of slavery and Jim Crow.

ライト牧師の「過ち」を繰り返さないためにアメリカにおける人種（主義）を直視しなければならぬというオバマの論理展開は、一見して非常に滑らか（seamless）である。おそらく、「この国の人種的不正義の歴史を復唱する」ことを目的とするわけではないという説明は、主に黒人以外のオーディエンスの胸襟を開くものであっただろう。それでもやはり、現在の人種状況が奴隷制やジム・クロー制の遺産としてあるという現実から目を逸らすことはできないというオバマの説明は、「過去」はじつのところ「現在」と切れていないというフォークナーの言葉と共振しつつ教育的な効果（educating effect）を見事に発揮している。前述した内的「矛盾」に「複雑さ」という要素が加えられているのに加えて、人種をめぐる議論がオバマの重要視する政策綱領と結びつけられている点も見逃せない。

これが、ライト師と彼と同世代のアフリカ系アメリカ人が育った社会の現実なのです。かれらは1950年代末から60年代初頭にかけて成人した世代です。当時はまだ人種隔離が法によって支えられ、機会は系統的に抑えつけられていました。

This is the reality in which Reverend Wright and other African-Americans of his generation grew up. They came of age in the late fifties and early sixties, a time when segregation was still the law of the land and opportunity was systematically constricted.

オバマが大統領選を通しジェシー・ジャクソンなどの市民権運動世代の黒人指導者から距離をとり続けていたことは、つとに有名な話である。先に引用した「真の黒人ではない（not black

enough)」という批判の多くはこの世代によるものであった。オバマが「1960年代の残滓」と言われるものに懐疑的であり、それと適度な距離をとることで「典型的な黒人政治家」とみなされることを回避し、幅広い支持を集めたことは事実である (Sugrue 2009: 48)。それでも、ライト牧師に代表される市民権運動世代の怒りの淵源を理解していると示すことは、人種という争点の基底にある（それ自体は人種の違いを問わない）構造的な問題を言挙げするのに必要なステップであった。また「理解」を示すことは力の源泉でもあったのである。

成功した黒人にとってさえ、人種と人種主義をめぐる問いは根本的なところでかれらの世界観を規定し続けているのです。ライト師世代の男女にとって、屈辱と疑いと恐怖の記憶は消え去ってはいません。当時の怒りや苦々しい思いも消えていないのです。その怒りは、公の場では、白人の同僚や友人の前では表明されることはないかもしれません。

Even for those blacks who did make it, questions of race, and racism, continue to define their worldview in fundamental ways. For the men and women of Reverend Wright's generation, the memories of humiliation and doubt and fear have not gone away, nor has the anger and the bitterness of those of years. That anger may not get expressed in public, in front of white co-workers or white friends.

その怒りはかならずしも生産的なものとは限りません。じつのところ、真の問題を解決することからしばしば注意をそらしてしまいます。怒りのせいでわたしたちは、いまある状況を作るのに自分たち自身が荷担していることを直視できません。アフリカ系アメリカ人コミュニティが真の変化を引き起こすのに必要な連携を築くことを妨げているのです。けれどもその怒りは現実にあります。力強いものです。ただ自然に消え去ることを祈り、その根っこにあるものを理解せずに非難するならば、人種間に存在する誤解の溝が広がってしまうだけでしょう。

That anger is not always productive; indeed, all too often it distracts attention from solving real problems; it keeps us from squarely facing our own complicity in our condition, and prevents the African-American community from forging the alliances it needs to bring about real change. But the anger is real; it is powerful; and to simply wish it away, to condemn it without understanding its roots only serves to widen the chasm of misunderstanding that exists between the races.

怒りをたしかなもの、歴史や記憶に根ざしたものと認定するいっぽうで、声高に怒りに訴えるという市民権運動世代の手法が現状変革につながらないどころか自らの共犯性に目隠してしまうのだという主張は、オバマが立脚する世代的な立ち位置を理解するうえでも重要である。「人種間に存在する誤解の溝」を広げないよう、怒りの根っこを直視しつつそれを自らの内に鬱積することなく真の変化を起こすために必要な連携を築くというアプローチは、オバマにとって「人種を超える (transcend race)」ための最初の一歩として重要である。

じつのところ、似たような怒りは白人コミュニティの一部にも存在します。労働者と中流層の白人労働者の大半は、自らの人種ゆえに特段優遇されてきたとは感じていません。かれらの経験は移民の経験なのです。かれらについて言えば、誰かの施しを受けたというわけではないのです。

In fact, a similar anger exists within segments of the white community. Most working- and middle-class white Americans don't feel that they have been particularly privileged by their race. Their experience is the immigrant experience—as far as they're concerned, no one's handed them anything.

黒人の怒りがしばしば非生産的であるように、白人の憤りも中流層の圧迫という真の元凶から注意をそらしてきました。・・・けれども、白人の怒りがもっともな懸念を根拠としていることを認識せずに、かれらの憤りがただ消失することを願ったり、見当ちがい、場合によっては人種主義的という烙印を押してしまえば、これまた人種的な分断を拡大し、理解への道をふさいでしまうことになります。これが今わたしたちの置かれている状況です。この人種的な行き詰まり状況にわたしたちは何年にもわたってはまだ続けているのです。

Just as black anger often proved counterproductive, so have white resentments distracted attention from the real culprits of the middle class squeeze.... And yet, to wish away the resentments of white Americans, to label them as misguided or even racist, without recognizing they are grounded in legitimate concerns—this too widens the racial divide, and blocks the path to understanding. This is where we are right now. It's a racial stalemate we've been stuck in for years.

白人の怒りに寄り添うというオバマの決断は、次節でも触れるように、主に黒人コミュニティからの反発を招きかねない「賭け」でもあった。黒人の怒りと白人の怒りを同次元のものとして扱っていると捉えられてしまえば、オバマの「人種問題」認識そのものの信憑性が損なわれる恐れもあった。それでもあえてオバマが白人の怒りに触れたのは、人種という争点があっばら黒人に関わるものであり、白人は傍観者として振る舞うことができるという見方を封じたかったからであろう。白人の怒りへの内在的な理解を示しつつ、人種をめぐる議論に白人を引き込むというオバマの戦略は、人種という争点が白人か黒人かを問わず、すべてのアメリカ人にとって重要であるという彼の信念から生み出されたものである。

アフリカ系アメリカ人コミュニティにとって、その道「[より完全な連邦]への道」とは、自らの過去の犠牲者となることなく過去の重荷を全面的に引き受けることを意味しています。それはアメリカでの生活のあらゆる面で完全なる正義を求め続けることでもあります。けれども同時にそれは、より良い保健医療や学校や仕事などを求める具体的な不平不満の声をすべてアメリカ人、たとえばガラスの天井を破ろうと奮闘する白人女性や一時解雇された白人男性、家族を懸命に養おうとしている移民といった人びとが抱えているより広範な願いへと束ねていくことでもあるのです。

For the African-American community, that path means embracing the burdens of our past without becoming victims of our past. It means continuing to insist on a full measure of justice in every aspect of American life. But it also means binding our particular grievances—for better health care, and better schools, and jobs—to the larger aspirations of all Americans—the white woman struggling to break the glass ceiling, the white man who's been laid off, the immigrant trying to feed his family.

歴史を直視しその重荷や責務を引き受けつつも「過去の犠牲者」になることは許されないという説明は、「変化」や「前進」に重きを置くオバマの歴史哲学を理解するうえでもっとも重要である。また白人の怒りへの個別的な言及はここでは「すべてのアメリカ人のより広範な願い」の重視へと止揚され、「全体」への統合なしに「部分」に十全な正義はもたらされないというオバマによる新しい人種認識の枠組みが提示されている。

皮肉なことに、自助というまことにアメリカ的な、そしてそう、保守的でもある観念は、ライト師の説教にたびたび見出されるものです。しかし、わたしのかつての師がたびたび理解し損ねていたのは、自助というプログラムに着手するのに「社会は変わることができる」という信念も必要であるということです。ライト師の説教の深刻な誤りは、わたしたちの社会にある人種主義について彼が語ったことではありません。まるでわたしたちの社会が変わることがないかのように、まるでこれまで何の進歩もなかったかのように彼が語ったことが誤りなのです。・・・けれども、わたしたちは知っていますし、わたしたちは見てきました。アメリカは変われるということを。それがこの国の真の特質なのです。わたしたちがすでに成し遂げてきたことは、わたしたちが達成できること、達成しなければならないことへの希望を、希望を抱くことの大胆さを与えてくれます。

Ironically, this quintessentially American—and yes, conservative—notion of self-help found frequent expression in Reverend Wright's sermons. But what my former pastor too often failed to understand is that embarking on a program of self-help also requires a belief that society can change. The profound mistake of Reverend Wright's sermons is not that he spoke about racism in our society. It's that he spoke as if our society was static; as if no progress has been made; ...But what we know—what we have seen—is that America can change. That is true genius of this nation. What we have already achieved gives us hope—the audacity of hope—for what we can and must achieve tomorrow.

ネイション・オブ・イスラームのルイス・ファラカンに代表されるように、「急進的な」黒人指導者が自助という新保守主義的な価値を重視するという逆説的な現象については、これまでも多く分析がなされてきた（ケリー 2007）。だが、自助という発想そのものではなく、自助が実践されるアメリカ社会の可変性に注目するオバマの議論は、独特である。オバマは、とすれば人種主義の構造的側面への批判や告発に横やりを入れかねない自助という発想をあえて手放さないことによって、社会が可変である以上、希望を未来に向かって投企することでわたしたちもまた変わることができると論理づけるのである。

⁷ 社会を可変的なものと捉えていないことに加えて、ライト牧師の「アフリカ中心主義」的思考が人間の文化をも固定的・不変的なものと前提しているという批判もある（Walker and Smithers 2009: 48）。

白人コミュニティにおいてより完全な連邦につながる道は、アフリカ系アメリカ人コミュニティを苦しめているものが黒人の心にだけ存在するのではないと認識することで。差別の遺産や現在起こっている差別的な事件は、かつてほどあからさまではないにせよ現実のものであり、取り組みを要する事柄です。・・・すべてのアメリカ人は、他人の夢の実現がかならずしも自分の夢を犠牲にするわけではないということを理解する必要があります。保健と福祉に投資し、肌の色が黒か褐色か白かに関係なく子どもたちの教育に投資することが、結局はアメリカの繁栄に寄与するのだということを理解する必要があります。

In the white community, the path to a more perfect union means acknowledging that what ails the African-American community does not just exist in the minds of black people; that legacy of discrimination—Trinity United Church of Christ—and current incidents of discrimination, while less overt than in the past—are real and must be addressed.... It requires all Americans to realize that your dreams do not have to come at the expense of my dreams; that investing in the health, welfare, and education of black and brown and white children will ultimately help all of American prosper.

ここでは、人種の違いを越えて誰もが自分の事柄として了解することが「人種問題」の解決につながるという捉え方と、「過去はじつのところ現在である」というフォークナーの訓戒が、継ぎ目なく結びつけられている。人種をめぐる議論として開始されたものが、人種を超えた「あるべきアメリカの未来」の実現を可能にする処方箋の提示へと止揚されているのである。「より完全な連邦」演説の射程の広さと聞く者全員を「当事者」として引き入れる論理構成上の巧みさが、ここに集約されていると言えるだろう。

3. さまざまな解釈と分析

オバマの「より完全な連邦」演説は、名だたる歴代大統領の名スピーチと並べて評価されるなど、単に窮状打開のきっかけになるにとどまらず、彼の政治家としての資質の高さを印象づける画期となった。ここでは、幾人かの識者によるコメントに触れることで演説のさらなる再文脈化を試みたい。

非常に早い時点からオバマ支持を表明していた代表的なアフリカ系アメリカ人知識人のひとり、マニング・マラブルは、演説を「傑作」として評価している。彼は、論争的であり複雑な人種をめぐる争点に関して同意や共通基盤を模索する方向に人びとを見事に誘導していくオバマの手腕と説明論法に賞賛を惜しまない。そのうえで、人種の歴史に繰り返し言及しながらもその歴史が現在や未来を決定する（あるいは制約を加える）との見方を退けている点に、オバマの思想の核心を見出している。また、たとえば保健医療をめぐる問題が「ラティーノの戦略」や「アフリカ系アメリカ人の戦略」など人種別の戦略によって解決されることはなく、「多人種」「階級横断的」な連携によってはじめて変化を起こすことができる、というオバマの現状認識にも強く同意する。ただ同時に、「人種化 (racialization)」と解釈されるものの回避に拘泥することでアメリカの人種 (主義) をめぐる疑問にオバマが正直に答えることができないという難点を指摘している。マラブルによれば、たとえばオバマを支持する低所得の白人層が少ないのはオバマが黒人であるから、という明白な事実をオバマが語ることはないのである (Marable 2008)。

著名な社会学者でクリントン政権期にアドバイザーとして政策に影響を与えたアフリカ系アメ

リカ人知識人であるウィリアム・ジュリアス・ウィルソンもまた、マラブルとは政治的な立場を異にしながらもオバマの演説を高く評価している。ウィルソンは、人種や貧困という「特殊な争点 (specific issues)」の解決が、公正性や正義を重視することに加えて、すべての者に関わるものとして広く捉えられることではじめて達成されるというオバマの説明を、「わたしが抱いている思考枠組みのモデル (a model for the type of framing I have in mind)」になると手放しで賞賛する (Wilson 2009a: 139; Wilson 2009b: 141-142)。アフターマティヴ・アクションなどの政策をアメリカ社会で抵抗なく遂行するにあたって白人層の支持を獲得するために受益層を拡大する必要があると説く、「実利的なカラーブラインド主義」の立場を採っていたウィルソンからすれば、「カラーコンシャス」を備えたオバマの思考枠組みへの同意はたしかに立場変化を反映している (Wilson 1996)。

聖書学の立場からオバマの演説を扱ったオベリー・ヘンドリックスは、マラブルやウィルソンとは違った観点から分析を加えている。彼は、演説のなかで問題化されたのは、ライト牧師が行った「社会批判の実体 (substance of his social critiques)」ではなく扇動的な言葉を用いるという「ライトの話法 (Wright's rhetorical style)」であった、と強調する。そのうえで、問題となったライト牧師による説教の映像のなかで語られた言葉については一語も言及されておらず、ライト牧師による批判の内容の一つひとつが正確かどうかという検証も行われていないと指摘している (Hendricks 2009: 176)。この「空白」ないし「沈黙」に演説を読み解く鍵があるとヘンドリックスは捉えているのである。

他方、おそらく演説を批判的に捉える見解としては、以下のようなものが代表的である。世俗派ユダヤ教徒の作家アダム・マンズバッハは、「白人の怒り」へのオバマの共感に批判を向け、「かれら [白人] が怒っているのは、優遇のされ方が充分ではないと感じているからだ」と断じる。黒人への歴史的・構造的な差別と「白人の怒り」を同次元で扱うことに異議を唱える彼は、「白人の特権性の本質は持っていることを知らないということにある。アメリカの白人は、追い風を背中に受けていながらも、走っているスピードが——それが具体的にどの程度であれ——どれほど自らの制御の及ばない力に拠っているのかを決して理解することのない自転車乗りと同じである」と指摘する。「白人の特権性」をそのように捉えたうえで、情緒を優先して事実をねじ曲げたと、マンズバッハは演説を批判するのである。「語調を弱めて白人の特権性の実態を説明することは、多くの人びとを議論の場に連れてくるのに役だったかもしれない。だが、その者たちが集まっているのが偽りによるのであれば、居つくことはないだろう」と、白人性批判という選択がなされなかったことを問題として追及する (Mansbach 2009: 75-83)。マンズバッハの立場は前述のウィルソンのものとは著しく対照的である。

IV. むすびにかえて——「ポスト人種社会」とバラク・オバマ

「より完全な連邦」演説が多くのアメリカ人を人種 (主義) という争点に当事者として振り向かせ、オバマを大統領候補としてふさわしいと印象づけたのとは対照的に、演説がライト牧師の琴線に触れることはついぞなかった。演説の翌月、長時間におよぶインタビューや黒人組織支部での講演、さらには全米記者クラブでの会見などで矢継ぎ早に全米の注目を浴びたライト牧師は、自らの発言が「本来の文脈から切り離されている (taken out of context)」と強調しただけでなく、オバマの演説を政治的な便宜主義の産物と切り捨てた。ここにいたって、オバマはライト牧師との絶縁を宣言せざるをえなくなる。ライト牧師の反論の言葉は「ぞっとさせるものだと思います

し、わたしに関わること、わたしの人となり、そのすべてにまったく反しています」と苦々しい表情で説明し、自らがいったんは差し出した手を引っ込める決断を下した (Herbert 2008; Zeleny 2008)。そしてついに5月31日、オバマは妻のミシェルとともにトリニティ教会から籍を抜くことを発表し、長年彼の精神的な支えとなり、自身の著書のタイトルともなった「希望を抱くことの大胆さ (audacity of hope)」の重要性を教えてくれたライト牧師との関係を清算することになったのである (Powell 2008)。

はたして「より完全な連邦」演説の検討は、オバマと「ポスト人種」の関係を分析するのにどのような示唆を与えてくれるのか。最後にこの点を考えてみたい。

オバマの人種 (主義) への向き合い方は、(前節で論じた) 社会と個人が内面的に抱える「矛盾」という、「より完全な連邦」で展開されている観点への注目抜きには理解しえない。たしかに「黒人政治家」「黒人候補者」というように特殊利害を代表する存在として分類される (pigeonholed as) ことへの抵抗は、大統領選の初期においてはとくに痛々しいほど顕著であった (Goff 2009: 48)。オバマのそうした反応に、選挙戦術として周到に選ばれ実践された部分があったことは間違いないだろう。そしてまた、そのことがライト牧師に代表されるような市民権運動世代の黒人指導者などに疎外感を抱かせる結果になったとも言えるだろう。これらを指してマニング・マラブルは、オバマが持つ「人種を超える」というイメージが若い白人や中・上流層の白人からの支持を促すいっぽうで、黒人票が一年以上も放置されていたと指摘する。マラブルによれば、選挙戦の伝統的な戦い方は中核的な支持基盤——つまりアフリカ系アメリカ人——をまず固めたうえでそれ以外の層へと手を伸ばすというものであるが、オバマ陣営が行ったのはその逆であった (Marable 2008)。その意味で、「黒人政治家」としての自己規定の弱さと戦い方の非伝統性を、「ポスト人種」の証左であると解釈される余地はたしかにあったのである。

けれども、黒人ではないと捉えられることへの憤りもオバマによってたびたび表明されていた。2006年11月に『サンデー・タイムズ・マガジン』誌に載った、「わたしが黒人ではないとか、黒人かどうかは関係ないというようなふりは、皆さんにしてほしくありません」(ロック 2007: 92) という説明は、人種的か非人種的かという二分法でつかみ取ることができないオバマの思想が表出した言葉と言える。オバマの内にある黒人としての明確な自己認識は、アメリカという国の成り立ちにおいて人種 (主義) が持ってきた意味とすりあわせながら人種分断的状况の克服へと歩を進めることを可能にしてきた。言い換えれば、そのような自己認識が「ポスト人種主義」を無批判に受容することを阻止しているのである (Walker and Smithers 2009: 92-93)。

たしかに、「ポスト人種社会」論はオバマの登場とともに隆盛し、人種主義の問題化を困難にしたという面は否めない。また、オバマにより白人の「良心の呵責」が減免され、「ポスト人種社会」論は受け容れられやすいものになった。オバマが「ポスト人種社会」論と共振するような主張を繰り返していたため、彼の当選が「ポスト人種社会」論の説得性の強化に皮肉にも貢献したという見方には、たしかに首肯できる部分がある (武井 2012)。だが、前述した「矛盾」に注目し、人種的か非人種的かという二分法をいったん棚上げて考えるならば、オバマの思想のなかに「ポスト人種」的なものを内破する契機が埋め込まれているとみることも可能ではないだろうか。

オバマの思想および行動と「ポスト人種社会」との (よく言われる) 親和性を解体すること、じつはこれが本稿の重要な課題であった。演説を読み解く鍵であった「矛盾」とオバマの思想的変化や逡巡を「断絶」としてではなく「多面的な総体」として捉える視座を持つことによってはじめて、自伝的小説を含めた著書で構造的な人種主義への批判を展開していたオバマ (オバマ 2007a; オバマ 2007b) と「変化」や「希望を抱くことの大胆さ」の重要性を「人種を超えた」地

平で強調するオバマが不可分な総体として立ち現れるのではないだろうか。

参考文献

<日本語文献>

- オバマ、バラク 2007a年 『マイ・ドリーム——バラク・オバマ自伝』（白倉三紀子／木内裕也訳）、東京：ダイヤモンド社。
- 2007b年 『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』（棚橋志行訳）、東京：ダイヤモンド社。
- ケリー、ロビン・D・G 2007年 『ゲッターを捏造する——アメリカにおける都市危機の表象』（村田勝幸／阿部小涼訳）、東京：彩流社（Kelley, Robin D. G. 1997. *Yo' Mama's Disfunktional: Fighting Culture Wars in Urban America*. Boston: Beacon Press）。
- クロッペンバーグ、ジェイムズ 2012年 『オバマを読む——アメリカ政治思想の文脈』、東京：岩波書店。
- 武井寛 2012年 「『ポスト人種社会』論の課題——2008年大統領選挙とバラク・オバマ」、『アメリカ史研究』第35号、80-96頁。
- 藤永康政 2013年 「黒人政治の黄昏——バラク・オバマの時代と公民権運動の選択的記憶」、『歴史学研究』第907号、26-32頁。
- ロック、ライザ 2007年 『オバマ語録』（中島早苗訳）、東京：アスペクト（Rogak, Lisa, (ed.) 2007. *Barack Obama in His Own Words*. New York: Carroll & Graf Publishers）。

<外国語文献>

- Goff, Keli 2009. "Living the Dream", in T. Denean Sharpley-Whiting (ed.), *The Speech: Race and Obama's "A More Perfect Union"*, New York: Bloomsbury.
- Heilemann, John, and Mark Halperin 2010. *Game Change: Obama and the Clintons, McCain and Palin, and the Race of a Lifetime*, New York: Harper Perennial.
- Hendricks, Obery M., Jr. 2009. "A More Perfect (High-Tech) Lynching: Obama, the Press, and Jeremiah Wright", in T. Denean Sharpley-Whiting (ed.), *The Speech: Race and Obama's "A More Perfect Union"* New York: Bloomsbury.
- Herbert, Bob 2008. "The Pastor Casts a Shadow", *New York Times*, April 29.
- Jackson, Derrick Z. 2009a. "Wright Stuff, Wrong Time", in T. Denean Sharpley-Whiting (ed.), *The Speech: Race and Obama's "A More Perfect Union"*, New York: Bloomsbury.
- 2009b. "Mutt on CP Time, Disciple of Malcolm", in T. Denean Sharpley-Whiting (ed.), *The Speech: Race and Obama's "A More Perfect Union"*, New York: Bloomsbury.
- Kantor, Jodi 2008. "The Wright Controversy", *New York Times*, March 13.
- Lipsitz, George 1998. *The Possessive Investment in Whiteness: How White People Profit from Identity Politics*, Philadelphia: Temple University Press.
- 2011. *How Racism Takes Place*, Philadelphia: Temple University Press.
- Mansbach, Adam 2009. "The Audacity of Post-Racism", in T. Denean Sharpley-Whiting (ed.), *The Speech: Race and Obama's "A More Perfect Union"*, New York: Bloomsbury.
- Marable, Manning 2008. "Racializing Obama", *Souls: a Critical Journal of Black Politics, Culture and Society* (Web Forum),

- <http://www.columbia.edu/cu/ccbh/souls/firstperson.html>.
- Obama, Barack 2008a. *Barack Obama's Speech on Race: "A More Perfect Union"*, BN Publishing.
- _____ 2008b. "On My Faith and My Church", *Huffington Post*, March 14.
- Powell, Michael 2008. "Following Months of Criticism, Obama Quits His Church", *New York Times*, June 1.
- Sugrue, Thomas J. 2009. *Not Even Past: Barack Obama and the Burden of Race*, Princeton: Princeton University Press.
- Sullentrop, Chris 2008. "A Sermon's Echoes Threaten Obama", *New York Times*, March 13.
- Walker, Clarence E. and Gregory D. Smithers 2009. *The Preacher and the Politician: Jeremiah Wright, Barack Obama, and Race in America*, Charlottesville: University of Virginia Press.
- Wilson, William Julius 2009a. "Why Obama's Race Speech Is a Model for the Political Framing of Race and Poverty", in T. Denean Sharpley-Whiting (ed.), *The Speech: Race and Obama's "A More Perfect Union"*, New York: Bloomsbury.
- _____ 2009b. *More Than Just Race: Being Black and Poor in the Inner City*, New York: W. W. Norton.
- _____ 1996. *When Works Disappears: The World of the New Urban Poor*, Vintage Books.
- Zeleny, Jeff 2008. "Obama Says He's Outraged by Ex-Pastor's Comments", *New York Times*, 29 April.